

(地域紹介レポート1)

開発援助に遣わされて (タイ家畜衛生改善計画)

難 波 功 —※1

Life in Thailand seen by a Technical Cooperation Expert.

—その1—

観光でタイを訪ねられた方なら「唐芥子のきいた料理」や下町で働く人々の「遅しさ」に、また、タイの人と何等かの交流を持った方ならタイの人達の「思いやり」に感銘を覚えられた方が多いものと思われる。私が住んでいたパクチョンという町はバンコックから東北へ170キロほど離れている。夕方になると果物や野菜と共に家族を載せた荷車が道路を行き交い、40年前の日本の農村を思い起こさせる。寝室・居間の壁や天井には虫を求めてやってきたヤモリが徘徊する。静かにしていると大声を出してなく。水道はあるが5月から10月の雨期になると泥が混じるので飲料には適さない。「安全」「清潔」「効率」を判断の基準としている現在の日本人には少々住みづらいかもしれない。英語は殆ど通じない。しかし、タイの人は礼儀正しく思いやりに満ちている。こういうことが手伝って、1年の滞在予定がその後の12年の内の6年をタイで過ごすことになった。

12月の終わりから1月初めのタイはバンコックでも20度ぐらいまで冷え込むことがある。内陸のパクチョンでは15度を割る。毛布だけでは寒いので、タイへ着いた(12月17日)私は少し厚めの布団を買う事にした。バンコックのデパートを下見すると3,000バーツ(約15,000円)前後。躊躇していると、仕事を共にしてくれるタナラットさんが「パクチョンで買うと安い」という。パクチョンの市場へ行ってみた。バンコックで売られてい

た木綿の布団と違い化学繊維で作られているが何と200バーツ、店主は180バーツにするとする。2シーズンならこれで十分、私は喜んで買った。運転手のソンポンさんにこの話をしたところ、材料を買って自分で作ればもっと安くあがると言う。同じ目的を達成するために、価格に15倍もの違いがある物が用意されている社会に驚いた。タイの人と日本人の価値観・美意識の違いを考えるきっかけになった。

決められたリズムで生活することが好きな私は、起床・祈り・出勤・帰宅・シャワー・夕食・データ整理・翌日の仕事の準備・読書・家族への手紙の執筆・祈り・就床の時間を決め、余程の用件が無い限りそれを厳守した。パーティーに誘われた時も8時半までには帰宅し、データ整理・翌日の仕事の準備・読書・家族への手紙の執筆・祈りを欠かさなかった。バンコックのアパートで過ごす祭日や週末も、本と新聞とパソコンを相手とし、泊まりがけの旅行は殆どしなかった。1,500字を目処に毎晩、書き綴った家族への手紙は主が与えて下さっている貴重な1日の証しになった。任期を終えた時、あの仕事もやっておけばよかった、この技術も教えてあげればよかったという反省は残ったが、コンテナに隙間無く物を納め得た時に似た満足感があった。

—その2—

私達日本人が見るバンコックの市場は食べ物に

※1 農林水産省家畜衛生試験場海外病部長／元 タイ国派遣技術協力専門家

Koichi Nanba, National Institute of Animal Health, Ex-Technical Cooperation Expert to Thailand.

溢れている。屋台を含めればレストランの数は極めて多い。50mに1、2軒といった具合である。しかし、国土の3分の1を占める東北タイに住む人は、蒸したもち米とソムタム（未熟のパパイヤの千切りを唐辛子で味付けしたもの）が主食である。数年前、国立教会の向兄弟の発案で作った「私達が捨てる25%の食料で作った料理」の方がカロリーも多く高級だ。ところが、日本では今年になって緊急輸入したタイ米が売れないどころか最近に至っては捨てる人まで現れた。5キロを10円で売る店もある。動物の飼料や加工米にしたらいよいよという意見も出されている。国会議員もタイ米からネズミやゴキブリの死骸が出たことを取り上げた。これなどは日本人の美意識を利用したタイ米嫌いを助長させる卑怯きわまりない戦術だ。タイのスラムに住む姉妹は献堂式の日を用意された鳥の足と頭のカラアゲ料理の席で「日本人達は高級アパートに住み美味しいものを食べている。しかし、私達はこういう食べ物でも生きて行ける力が与えられている」と証しされたそうである。こういう日本の社会を作った私達の責任は極めて大きい。

私はタイへ出かける前、バンコックでは家庭で使う水道水の総量が水道局が供給する量を上回っている（＝水道管に穴が開いたり、ジョイント部分が壊れているので地下水が混じり込む）ので煮沸した水以外は飲んではならない、コレラをはじめ食中毒を引き起こす菌が多いので生物（なまもの）は食べるな……いろんなことを聞かされた。事実、我国はタイのトウモロコシにはアフラトキシン（ある種のカビによって作られる発ガン物質）が含まれているということで輸入を控えている。こういう時は専門的な知識も災いする。私もタイへ来て暫くは油膜で白く汚れたコップで水を飲むのに苦勞した。何百人もが使ったと思われるような箸でラーメンを食べるのは気分が悪い。使用しない時は蠅に覆われる「まな板」しかり。しかし、食中毒はそうそう起こらない。私はニッタヤさん（食事、洗濯、掃除をお願いしていたメイド）が作ってくれる料理を7年間も食べていたが食中毒にやられたという経験は記憶に無い。タイをはじ

め東南アジアに対する日本人のイメージ“不潔・汚い”は強すぎる。

私の宿舎にはシャワー室に電気温水器がついていた。しかし、湯水期（1月中旬から4月）になると水圧が弱過ぎて使えない（安全装置が働き電気が入らない）。水のシャワーで我慢する。それも朝夕の2回。しかし、僅かばかり流れる水で石鹸を落とすには10分はかかる。小さい洗面器に2杯ほどの水だ。20度ぐらいまでならどうにか我慢出来るが15度を下がると気合いを入れていても途中から震えだす。運が悪いと流している途中で断水する。こういう時はタオルで石鹸を拭き取っておく。少し気持ちが悪いが肌荒れだけは防げる。バンコックのアパートに住む友人に話すと、笑いながら「難波さん、それは歳ですよ」と言う。数週後、使われていない洗濯機に昼間のうちに水を溜めておき、タイの人と同じように洗面器で水を被れば1、2分の我慢で済むことを思い付いた。パクチョンの冬は大変だった。

### ーその3ー

タイは2月中旬から突然暑くなる。3、4月はとにかく暑い。雨期が2ヵ月遅れた一昨年は35度を越える日が150日以上続き、40度を越える日もあった。こうなると水が大切になってくる。タイの人達も1日にコップ10杯の水を飲むようにしているようだ。日本では一度にコップ2杯の水を飲むのは難儀だがタイでは簡単に飲める。飲み水が売られていない田舎では雨期に溜めた雨水が飲料水として使われる。私も飲んでみた。時々、木の葉や蟻が混じっているが実に美味しい。タイでは客に水を出す習慣があるが「なるほど」と解る。「便利」ということに関心が強いタイの人はビニール袋を手軽な水筒にしている。子供達はコカ・コーラを入れストロー挿し口の部分をゴム輪で縛り、歩きながら時々チューチューやっている。観光でやってきた日本人には子供達のファッションのように見えるかもしれないが、この時期のタイは30分に1度は水が欲しくなる。

タイの正月は4月はじめのソンクラ（＝水掛け祭）。火災樹やゴールデンシャワーの花が咲き

競う。国の機関は2日、銀行は3日、会社は普通1週間の休みにする。日本の年末のようにバンコクへ出て働いている人達の大移動が起きる。東北タイへ向かう長距離列車やバスには屋根にまで人（若者に限る）が乗る。途中の駅で止まるとはいえ炎天下の中を6時間も8時間も揺られるのだから大変だ。毎年、数人が振り落とされて死んでいる。仲間とトラックをチャーターし、鐘・太鼓を鳴らしながら故郷へ帰る人もいる。リュックを背負いオートバイに2人乗りをして帰る若者も多い。親、兄弟、友人に逢いたい一心が危険や肉体的な苦痛を忘れさせているようだ。事故に遭うと、親、兄弟をもっと悲しませることになるとは考えない。タイでは労働者の賃金は極めて安い。日本の10分の1に満たない。それでもバンコクに住む東北タイの出身者の多くは毎月のように親、兄弟へ仕送りをしているという。思いやりに満ちた人なのだ。

ソンクラーの時期のタイは本当に暑い。いつもは心地よい風が熱風に変わる。しかし、そういう暑さを忘れさせるかのように、田舎（パクチョン）は都会から帰ってきた若者で賑わう。ニッタヤさんの2人の息子も私に合いに来てくれた。水掛け祭はとにかく楽しい。若者はトラックに河や溜池で汲んだ水を積み、通行人や車に投げつけながら駆け回る。幼なじみであろうか、若い女性も一緒に乗って歓声をあげている。水をかける相手は誰でもかまわない。5リットルほどの水を狙いをつけて投げつける。4、5人が同時に投げるので時にはバケツ1杯ぐらいの水を被ることもある。オートバイに乗っている人は大変だ。直撃を受け止まってしまう。勿論、自分達も水をかけられるので、ズブ濡れになっている。子供達は軒先に水を入れた桶と柄杓を用意して通行人を待ちうける。場所によっては2階のベランダから水が飛んでくる。誰でも飛び込んで行ける、こういう祭りは素晴らしい。顔が輝いているのは水で濡れているせいではない。

#### ーその4ー

ソンクラーが終わると待ちに待った雨期がやっ

てくる。5月、6月の雨は勇ましい。午後3、4時になると決まったように黒雲が広がり雷が鳴り出す。5分もすると突風を伴ったスコールがやってくる。叩きつけるような雨だ。タイの人は濡れることをそれほど気にしないが、スコールの時は急激に気温が下がるので一斉に避難する。普段はけたたましい音をたてて走り回るサムロ（オート3輪）やオートバイタクシーもこの時ばかりはお客が乗らないので一休み。30分ほどで小降りになるが、排水の悪い所は河のようになる。水を吹き出している下水溝も珍しくはない。増えすぎた車で普段でも渋滞を起こしているバンコクの交通事情は更に酷いことになる。全く動かないことさえある。こうなると交通整理をしている警察官もお手上げだ。私は10キロの道に4時間をかけたことがある。そういう時でもソンポンさん（運転手）はイライラしない。「怒っても解決しない」からだと言う。

この季節は蚊が多い。ソンポンさんの昼寝の場所になっていた私の車には、2、30匹の蚊が何時もいた。私が行き先を告げ、車が走り出すと彼は窓を少し開け、飛んでいる蚊を手で追い出す。決して殺そうとはしない。最初は何故殺さないのか不思議でならなかった。彼が蚊にさされないのも不思議であった。ある時、彼に「どうすれば蚊に刺されなくなるか」聞いてみた。簡単「日焼けして黒くなればよい」という。私はさっそく実行した。最初の1週は30分、次週は1時間……といった具合。3ヵ月ほどでタイの人より黒くなった。効果テキメン。毎晩、仕事の整理、報告書の作成、A41枚の手書きなどで、パソコンと睨み合っているとディスプレイと顔の間を蚊がよぎる。しかし、それほど蚊がいても刺されない。「蚊は無数にいるのだ。少しぐらい殺してもきりがない。だから、ソンポンさんは殺さないのだ」ということに気がついた。それからタイへ着くとまず「日焼け」して、外観だけはタイの人のようになっていた。

雨期も7月を迎えると少しぐずついた天気になる。4月、5月には木全体が真っ赤になるほど花を咲かせていた火炎樹も緑に変わる。暑さも治ま

り日本の夏よりも凌ぎやすくなる。仕事から帰ると毎日のように庭の手入れを楽しんだ。雨期の初めに垣根がわりに植えた30本のブーゲンビリア、30m四方ほどの庭の芝生、近くの空地に植えた70本のマンゴーの木が対象だ。すごい勢いで成長する。ブーゲンビリアは枝を1週で30cmほど、芝生でも1日に1-2cm伸びる。マンゴーも髭のような形の薄茶色の若葉を1週間で大きな緑の葉に変える。メロンを持ってきてくれた友人に何日で収穫できるか聞いたところ、種を植えてから50日だと言う。パパイアの苗木（鉛筆ぐらいの太さ）も1年でそのような実をつける。庭にはジャイさん（ニッタヤさんの主人）が植えてくれたハイビスカスや薔薇もあった。ガーベラはタンポポのように駐車場の脇に咲いていた。

#### —その5—

海外生活も半年を過ぎると徐々に疲れが蓄積する。仕事もだんだんきつくなる。難しい仕事が残っていくからだ。宿舎に帰ると足どりが重くなる。寝室（2階）へ上がる階段をベッタン…ベッタン…いわせながら登る。楽しみにしていた家族への手紙（1,500字）も苦痛になってくる。脳細胞のどこを調べても書くべきことが何も無い。やっとの思いで書きはじめるが200字ほど書くとどうにも先へ進まない。普段と違い話題を展開させることが出来なくなっている。ソファーに横になり思案する。「あーあ」と呟くこともあった。苦し紛れにタイのウィークリーニュースに面白い記事が載っていないかと調べたこともある。何も無い。つまらない事でも私がタイの生活を通して感じたことを書くほうが、家族には面白いと思え取り直す。研究室の側の池で飼っているグッピーのことまで書いたことがある。こういうことが何度もあった。

私が参加したプロジェクトでは昔から、毎週、金曜日の午後3時からバンコックで会議を開いていた。会議の内容を思えば不便なところで働いているパクチョン在住の専門家が早めにバンコックへ出られるようにと仲間達が配慮してくれたようである。相当前のことであるが、そういうわけで

木曜日の夜になると「明日の夜はバンコックで日本食でも食べてみよう」「お湯の風呂にドブプリ浸かってみよう」…という思いが頭を横切った。しかし、主は私の1日を終えた時の感謝の祈りを聞き入れて下さった。思うように進まない仕事も…、不便な生活環境も…、タイの自然も…、親切なタイの人も、全てが私に必要なものとして神様が与えて下さっていることに気がついた。タイへ遣わして下さっていることを感謝した。「君はどうしてそれほどタイに肩入れする」「日本にとってどういうメリットがあるんだ」「君は管理職にはなれないぞ」…後方から聞こえる様々な雑音も消えていた。タイの人はなんと素晴らしいのだろう、タイの自然はなんと美しいのだろうと感じた。この経験は主を知る上で何物にも換え難い。

タイにはこんな美しい言葉がある。ルー・ペイ、ルー・チャナ、ルー・アーパイ（負けを知り、勝ちを知り、許すを知る）。日本人に知ってもらいたい言葉である。詩人だったラマ6世の言葉ではと友人は言うが本当のことは解らない。公会堂、運動競技場、体育館など、いろんな所に書かれている。タイの子供の作文を読んだことがある。私達タイ人は昔から外国の人がタイへ来てタイの人間になってくれることを喜んでいるという主旨のものであった。タイ民族は中国民族の居住圏の外辺に住んでいたが、人口増加の圧力（蒙古民族の圧力という説もある）におされて南下移動し（9から11世紀）、インドシナ半島中央部に定着するようになったと言われている。もともとは中国文化の影響を受けていた人達である。しかし、この土地にはすでにインド文化の影響を受けていたモン族、クメール族（カンボジア）が生活しており二次的にインド文化が伝達された。中国的な伝統を守りながらヒンズー・仏教文化を受容し社会を形成していったものと思われる。ルー・ペイ、ルー・チャナ、ルー・アーパイはタイの歴史文化の偉大な遺産のように思われる。

#### —その6—

タイでは「立入禁止」「危険」と書かれた看板を滅多にみない。パクチョンの近くのカオヤイ自

然公園も、その例にもれない。トラ、象、鹿…が自然の状態で住んでいる。カオヤイとは大きい山という意味で、途中にいくつもの滝、崖崩れが頻発する道路…なんでも有りといった感じの場所である。タイは自分で「危ない」と思ったら自分で対応するというルールになっているのだろう。子供の時からそういう環境で育つと危険を察知する能力が自然と身に付く。道路工事の場所も同じようなもの。バリエーが置かれているが、これは工事の邪魔をされないために用意したものだ。ランドクルーザーだったので25cmほどの段差を乗り越えて工事中の道路に侵入した時のことだった。途中で警察官に止められ「段差があるので引き返せ」と言われた。ソンボンさん曰く「この車だったら走れるよ」。足回りを見た警察官は納得した。これなら「監視する人」も要らないし「看板を作る費用」もかからない。日本では校庭の木に登った生徒が落ちたとすると先生の責任が問われる。崩れた道路から落ちると国、県…町の職員の責任が問われる。マスコミも管理に問題があったと言って非難する。安全は大切だ。しかし、こういう社会で生まれた子供達はどのように成長するのだろうか。自分一人では適切な判断が出来ない人間や思いやりを欠く人間が増えはしないだろうか。怪我人が増える、行財政改革が難しくなるぐらいなら心配ないのだが。

世襲的な土地貴族と妾の一生を描いた連続テレビドラマを見たことがある。ドラマでは会話が短いので言葉が不十分でも少しは解る。このドラマで知り得たことが1つある。昔のタイの農村では世襲的な貴族の土地を耕したり、食事をはじめ諸々の家庭の仕事をしていたのは負債などによる奴隷で、一般農民には土地が与えられていたことだ。農民は時には貴族の田を耕して報酬を受けることもあるが、基本的には独立した自由民として生きていた。階級制度をつくり、宗教的な奉仕や村への奉仕をする者が高い位につく。しかも、その機会は誰にも平等に与えられていた。富や腕力は地位を得る手段になっていなかった。奴隷の間にも、信仰、年齢、経験（教養）によって地位が決まっていた。タイでは昔から個人主義が確立していた

のである。広大で豊かな土地があったこと、彼らに移入してきた人達であったことが自由な社会の形成したのではなかろうか。タイの人の明るさ（＝卑屈性がない）や合理性は、仏教思想ではなく、このあたりに発しているようだ。

広大で豊かな土地は人々の考え方のみでなく教育にも大きな影響を及ぼした。移入してきた人々は家族の労働力にみあった土地を耕す。子供達もやがて独立し新しい土地を求めて家をでる。肥えた土地を見つけて耕す。タイの農村はこのような形を繰り返して広がった。自然に恵まれていたので日本の社会のように共同で農作業を行う必要がなく、村落の形成はなされなかった。当然、人口密度は極めて低くなる。これは学校教育の普及に大きな支障をもたらした。今でも、中学・高校の数は少ない。パクチョンでも中学へ20キロの道を生徒がいる。高校になると80－100キロも離れている。そのため、高校へ行ける子供は地理的に恵まれた子か裕福な家庭の子弟に限られる。大学となると更に厳しい。義務教育とは政府に子供達を教育する義務があるという意味で（日本も同じ）、子供は教育を受ける義務があるというのではない。タイではガソリンスタンドやレストランで働く子供が大勢いる。勉強が嫌いなのではない。増え続けるエイズ患者、アンフェタミン常用者による交通事故の多発…タイにも陰は多い。しかし、これらは貧困によるものだ。異常とも思える一次産品の低価格に由来する。タイの人達の価値観・美意識が招いたものではない。

## －その7－

タイには約70の県があるが地方分権化はしていない。県知事をはじめ高官は中央政府からやってくる。この狙いは、国が地方の学校、病院、道路…を作ることで住民に中央政府のやり方に関心を持たすことを期待してのものらしい。そのため、県の大きさは人口数によって決まる。人口が一定以上に増えた県は2分割される（人口が多いところでは県の面積が小さくなる）。国の予算配分をはじめ、国会議員選挙、国体…行政を行う上で都合のよいシステムだ。しかし、問題も生じる。中央

から来た役人にとっては出先機関は腰掛けにすぎない。中央官庁へ早く帰るには上部機関の言うことに聞き従うほうが手っとり早い。彼等は行政上、都合の悪い事は報告を極力ひかえる。住民もそれを知っていて役人のすることに関心を示さない。タイの人の多くは、治める人と治められる人の関係を運命的なものとして捉えている。あの人達はエリートなのだと諦めているのだろう。タイの社会には縦の自由がないのが残念だ。

タイの人達の95%は仏教徒と言われている。男子は20歳になると寺院で修行を積む。修行期間は普通3-6ヵ月。大学生も例外ではない。夏休みなどを利用する。仏門に入る時は家族、親戚、友人が集まり特別の儀式を行う。私も招待されたことがある。小乗仏教では特別の修行を積んだ者だけがサンガの世界へ入ることが許される。食事は朝と昼の2回。もちろん、菜食。高僧から教典を学ぶ。真面目な生活に戻りたいと願っていた人だと思うが、私が働いた職場でも、これを契機に大酒を止め真面目な生活に戻った若者がいた。私の仕事をサポートしてくれたチャラン君もその一人だった。酒を飲んでオートバイで転ぶ。時には顔、肩、腕、手、指にいたるまでの擦り傷を負っていた。痛みが激しいと食欲が落ちるようだ。1週間ほどして出勤した時は痩せていた。それでも懲りない。しかし、修行を終えてからはそういうことが一切なくなった。結婚もした。友人が亡くなった時、再び頭を丸め僧の末席に座り葬儀のとりなしまで行った。

雨期は10月で終わる。この時期になると台風がやってくる。日本へ上陸し東へ向かう台風と違い、ゆっくりとした足どりだ。2日ばかり雨が続く。その後、突然のように乾期がやってくる。11月のはじめには各地でロイカトーン（灯籠流し）が行われ、バナナの葉で作った灯籠を夕方、川に流す。数千の灯籠が川面を照らしながらゆっくりと流れて行くさまは美しい。この頃になると農家の人も農作業から解放されている。子供を田舎へ残し、職を求めて都会へ行く人が増える。バンコックで働く労働者の3分の1は東北タイの人達と言われている。灯籠には人々のいろいろな祈りが込めら

れているに違いない。水掛け祭にしてもそうであるがタイの祭には人々の願い、祈り、喜びといったものがある。不自然さを全く感じない。

12月5日は国王の誕生日。王宮前の広場では終日数々の催しが開かれる。夜は一段と盛り上がる。会社、銀行、ホテル、デパート…は建物や樹木に取り付けた何千、何万という数の電球を点灯する。町全体が輝く。とにかく凄い。しかし、私にはピンときた。タイの人達は国王を心から尊敬し感謝しているのだと。主への感謝はこうであらねばならない。それに比べ私が行っていた奉仕や献金が何と恥ずかしいことか。私の心の中ではナルドの香水は話は話しになっている。買い物に行く。このお金を主の御用のために使って頂いてはとはめったに考えない。予算よりも安く済むと相変わらず「よい買い物が出来た」と喜んでいる。便利だと言って必要としない物まで買い込む。買ってはみたが気に入らないと言ってタンスで寝ている服もある。何年かすると体に合わなくなるので捨てることになる。こういう事を何年もやっていた。そういう私でも、2年間の留守のため、黴だらけになっている仕舞い込んでいた革靴の手入れを喜ぶようになっていた。

#### —その8—

帰国する度に共通する価値観・美意識を持つ大集団に出合うことになる。それも、多様な価値観・美意識を認めないというおまけまでついている。「日本でこんな国だったのか」と戸惑い感じるものがしばしばある。仲間から「君はタイへいた時の方が元気があったよ」と言われたこともある。正直なところ慣れるまでは息苦しい。徹底した同じ内容の情報と教育によって、人々が共通の価値観・美意識を持つようになったのであろうが、同じ考え方をする人間が集まる社会の弊害は極めて大きい。こういう社会では集団から外れると不利を被ることが多いため仲間意識を助長する。徹底した議論はなされない。違う考えがあることになかなか気がつかないこともある。国立の研究所という私の職場でさえ仲間意識が働き社会の要求に即応する研究がやりづらい。組織を変革すると大

勢の人が職を失うからである。次第次第に建て前（言っていること）と本音（行っていること）の使い分けが当たり前ようになる。

こういう環境では必然的に「大勢の意見が正しい」と判断されるようになる。たとえ失敗に終わろうとも、大勢の意見に従う限り「あの時はしかたがなかった」ということで、大抵のことは済まされる。時には他人のせいにする。太平洋戦争の反省がよい例だ。あれは軍のしたことだと思っている人が如何に多いことか。最近、在日朝鮮人女子生徒のスカート切りが起きている。大勢の日本人は「悪い人がいる」と思っている。「核疑惑と子供達とは関係ないのにねー」とトンチンカンなことを言う人もいる。「私達自身の体質がこういう問題を引き起こしている」という反省には至らない。残念なことだが、自分自身が社会に、日本という社会が世界に関わっていると考える人は極めて少ない。この国では自分の意志あるいは行為が、直接の影響を及ぼさなかった事に対しては他人事で済まされるようだ。韓国をはじめ東南アジアの人達がPKOの参加にさえ警戒するのは、日本人のそういう体質を恐れているからだ。

海外で仕事をしていると日本人の価値観・美意識の特異性に早晩気付く。私自身もタイで日本のシステムを取り入れたことがよくあった。「安全」「効率」「清潔」はワクチンを作るような仕事では欠かせない。仕事を成功させるにはチームプレーが必要だ。しかし、そのチームプレーを支えるのはチームワークである。タイの人が最も大切にしている問題だ。しかし、「効率」を気にすると、そのへんが忘れがちになる。ここ数年、国際化という言葉が流行した。国際化とは外国の文化・思想を取り入れることである。しかし、歴史を調べてみると、日本人が外国の文化・思想を取り入れたのは奈良時代の仏教と明治時代初期の開化思想の2回にすぎない。仏教にしても形は定着したが思想になると疑わしい面がある。明治の開化思想もしかり。最近の世論調査（NHK）では「物の豊かさ」よりも「精神的な豊かさ」を望む人が多くなっているという。私には日本人が望んでいる「精神的な豊かさ」とは何か解らない。異文化を

取り入れることが出来るのであろうか？

アセアン諸国のリーダー国のタイでは国際会議が多い。そういう時は日本政府へも案内が出される。しかし、余程のことが無い限り日本からは代表が来ない。数名で派遣されているアメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア…の代表を前に、1人で日本政府オブザーバー、国立研究所オブザーバー、国際協力事業団専門家、タイ代表の4役をこなすことになる。日本側の言い分は「年度途中で言われても出席予算を計上していない」の一点張り。ならば「翌年から予算化」すればよいのだが、そうはならない。日本のODA予算は世界一になっている。しかし、援助の内用、方法に注文を付けると「金を貰っているのに生意気だ」とすぐ怒る。相手国の社会システムを考えず都合のよいように計画を作りかえ、この方がベストだと言い張る。場合によっては内政干渉さえやりかねない。傲慢きわまりないやり方だ。米不足による騒動で見られたように、消費者は「わが家だけは国産米」と言って買いダメに走る。そのため「ヤミ米屋」が横行する。米泥棒も出る。国会議員もタイ米は不潔といって国民を煽る。こういう民族に援助が出来るのだろうか？

#### —その9—

豊臣秀吉の朝鮮征伐（こういう表現は適切ではないが）にも見られるように、日本人は錦の御旗が無くても猛進する。少々、こすっからい事をしてでも豊かになりたいのか、命令に聞き従う傾向が強いのか、…錦の御旗（正当性）が無くても事を行う民族だ。在タイ中はタイの人へ技術移転よりも日本側の関係者（支援組織）のプロジェクトに対する理解を得る方が大変だった。帰国してみると更に驚くことが生じていた。農産物の自由化に対処するために科学技術を駆使して日本の農業を救うように求められている。科学技術を日本のことのみに利用しようという、現在の日本を象徴していると言ってもよい考えだ。反応はどうか。「生産性を上げることは技術的に限界に達している。ならば、日本人の価値観・美意識を利用して、安全で日本人の嗜好性にあった農産物の生産に役

立つ研究をしよう」という意見、「政府は最大限の努力をしたという証しが欲しいだけだ」という意見…さまざま。こういう意見を聞くと、日本人の価値観・美意識はまだ当分変わらないような気がしてならない。

海外の生活では言葉の問題による生活の不便、絶えず求められる正確な判断力、人によっては家族との別離、…日本とは比べものにならないほど厳しい環境に置かれるため日本にいる時の数倍のストレスを受けると言われている。私もタイでの生活は最初は苦しんだ。大幅に遅れる仕事の進展には毎晩のように「ため息」が出た。明日の仕事に必要なレポートを渡しても予習してこないのでも半分以上のペースに落ちる。失敗も多い。自分一人でやるほうがどれ程簡単か何回も呟いた。しかし、これは「試みの中にいるときは、主の助けを遠くに感じる」ということを学ぶ大変よい機会だった。タイで働かせて頂いていることに感謝した。仕事が楽しくなった。計画にそって進むようになってから、J C F（日本語キリスト者集会）の会員になった。バンコックとは約200キロ離れていたが、毎週、日曜礼拝に出席することがゆるされた。タイの友人達は月曜日から始める仕事の準備を快く引き受けてくれていた。ソンボンさんは週末の運転を7年間もして下さった。家族の方の協力も有り難い。往復400キロ、1年では2万キロを越える。2度パンクした。しかし、2度とも宿舎の近くを時速10キロほどで走っていた時だった。バンコックへ行くときのような100キロ走行では大変な事故になっていただろう。日々の生活の中に、聖書のこの御言葉はこういう事なのかと気付くことがよくあった。喜んで手紙にした。1,500字ではとても書ききれない。健康にも恵まれた。全滞在期間（7年間）を通して病気で仕事を休んだのは風邪で高熱を出した時の3日間。主は私の弱さを知っておられるが故に多くの恵みを与えて下さった。